

「資本論を読む会」便り

2024.6.14 No. 87

5月の例会は、「第3篇 第9章 労働日」の続きを、前回レポーターをお願いしたAさんに引続き担当して頂きました。

※ 編集人の復習ノート。報告の要点と議論の簡単な紹介です。報告や議論を編集人はこう理解したということです。(なお、段落は本文の字下げで区切り、この章の中で1から番号を付けています。)

第88回

第1巻 第4篇 相対的剰余価値の生産

第10章 相対的剰余価値の概念 (つづき)

今読み進めている章は、剰余価値の増大と生産力の増大との関係を扱っています。その関連で、エンゲルス「空想から科学へ」について報告がありました。

「空想から科学へ」では、社会の発展に対して生産力の果たす役割がまとめられています。生産力の発展が資本主義的な生産様式を生み出しました。資本主義的生産は剰余価値の取得が目的であり、労働力を商品として価値通りに買って、それ以上の価値を引き出します。このような生産を継続するためには取得する剰余価値を増やさなければならず、生産力の増大をいっそう促すこととなります。今読んでいる章は、生産力の増大がどのようにして剰余価値を増やすかを明らかにしようとしている所です。

さて、この章の後半部分(第10～13段落)を要約すると(レジュメの「『資本論』要約」からの抜き書き)、次のようになります。頁番号は大月書店版「資本論」です。

6. 相対的剰余価値の生産(生産力が上がると労働力の価値が下がる)

……………

他方、新たな生産様式が一般化され、したがってまた、より安く生産される商品の個別の価値とその商品の社会的価値との差がなくなってしまうと、あの特別剰余価値もなくなる(419頁)。こうして、この過程を経て最後に一般的剰余価値率が影響を受けるのは、生産力の上昇が必要生活手段の生産部門をとらえたとき、つまり必要生活手段の範囲に属して労働力の価値の要素をなしている諸商品を安くしたときに、はじめて起きる(419頁)。商品の価値は労働の生産力に反比例する。これに反して、相対的剰余価値は労働の生産力に正比例する。それは、生産力が上がれば上がり、下がれば下がる。労働の生産力を高くしようとするのは、資本の内的な衝動であり、不断の傾向なのである。(420頁)

前回、相対的剰余価値が生ずる仕組みについて、

1. 生産力の上昇・発展は商品を安くする。
2. それにつれて、労働力の価値も小さくなる。
3. その結果、剰余価値は大きくなる。

の3つのポイントがあるとの説明があり、1は終わったので、今回は、この2～3を検討しました。

第10段落 (原著337頁、大月版419頁) に、

こうして、この全過程を経て最後に一般的剰余価値率が影響を受けるのは、生産力の上昇が必要生活手段の生産部門をとらえたとき、つまり、必要生活手段の範囲に属している労働力の価値の要素をなしている諸商品を安くしたときに、はじめて起きることである。

とあります。この「一般的剰余価値率が影響を受ける」とはどういうことかということ、「必要労働を短縮して、必要労働と剰余労働という労働日の2つの構成部分の量的割合を変化させること」(高木彰「相対的剰余価値の生産方法について」62頁)と説明がありました。

生産力が上昇してあらゆる商品の価値が小さくなれば、労働者の生活必需品も安くなり、労働力の価値そのものが小さくなります。すなわち必要労働が短縮され、その分、剰余労働は増やされ、剰余価値も大きくなる、ということです。

第11段落 (原著338頁、大月版420頁) は、労働の生産力が上がると労働力の価値は下がり相対的剰余価値は上がることに、数値を使った例で説明しています。(以下、単位のsはシリング、dはペンスを表す。)

12時間の社会的平均労働日の1日は、貨幣価値を不変と前提すれば、つねに6sという同じ価値生産物を生産するのであって、この価値総額が労働力の価値の等価と剰余価値とにどのように分割されるかには関わりなくそうである。しかし、生産力が上がったために1日の生活手段の価値、したがってまた労働力の日価値が5sから3sに下がれば、剰余価値は1sから3sに上がる。労働力の価値を再生産するためには、10時間が必要だったが、今では6労働時間(=10時間×3s/5s)しか必要でない。4労働時間が解放されていて、それは剰余価値の額分に併合されることができる。それゆえ、商品を安くするために、そして商品を安くすることによって労働者そのものを安くするために、労働の生産力を高くしようとするのは、資本の内的な衝動であり、不断の傾向なのである。(420頁)

この中に「労働力の日価値が5sから3sに下がれば剰余価値は1sから3sに上がる」とあります。日価値が5s - 3s = 2s下がるので、剰余価値はその分増えて1s + 2s = 3sとなるのは見やすいですが、労働力の日価値が5sから3sに下がる理由は示されていません。そこで、レポーターから図を使った詳しい説明がありました。紙面の都合でそれらの図は割愛させていただきますが、要点はだいたい次のようになるでしょうか。

①従来 : 1人の労働者が12時間で12個の商品を生産。労働力の日価値 = 5s
12時間の労働が生産する価値 = 6s、商品12個分の原材料等の価値 = 6s
∴ 商品1個の価値 = (6s + 6s) / 12個 = 1s
剰余価値 = 6s (12時間労働が生産する価値) - 5s (労働力の日価値) = 1s

②生産力上昇後 : 12時間で24個生産できるようになった。
12時間の労働が生産する価値 = 6s、商品24個分の原材料等の価値 = 6s × 2 = 12s
∴ 商品24個の価値 = 6s + 12s = 18s
∴ 商品1個の価値 = 18s / 24個 = 0.75s
元の価値 1s(①) と比べて 0.75倍

③生産力が上昇し「諸産業の諸商品」が安くなっていく → 原材料等も安くなる。
そこで、すべての商品が同じ割合 (0.75倍) で安くなったと仮定する。
∴ 上記商品1個の原材料の価値 = 0.5s × 0.75 = 0.375s に下がる。
∴ 上記商品24個の価値 = 6s (12時間の労働) + 0.375s × 24個 (原材料等) = 15s
∴ 上記商品1個の価値 = 15s / 24個 = 0.625s

元の価値 $1s$ (①) と比べて 0.625 倍

④全ての商品が 0.625 倍になるとすると、労働力の価値 = $5s \times 0.625 = 3.125s \doteq 3s$

こうして「労働力の日価値が $5s$ から $3s$ に下がる、の根拠が示されました。なお、編集人はピッタリ $3s$ になることを期待していたので、やや意外な感じもりましたが、まあこんなところかとも思いました。

資本家は商品を生産し販売して儲けようとしているのに、生産力を上昇させて販売価格を下げようとするのは一見したところ矛盾ですが、これについて第12段落(原著338頁、大月版421頁)で、大略、次のように述べられています。

商品の絶対的価値は、その商品を生産する資本家にとっては、それ自体としてはどうでもよいのである。【…】商品を安くすると同時に商品に含まれる剰余価値を増大させるのだから、このことによって、ただ交換価値の生産だけに関心をもっている資本家がなぜ絶えず商品の交換価値を引き下げようと努力するのかという謎が解けるのである。

相対的剰余価値は労働の生産力の発展に正比例して増大するのに、商品の価値は同じ発展に反比例して低下するのだから、つまりこの同じ過程が商品を安くすると同時に商品に含まれる剰余価値を増大させる。

商品を安くすることによって労働者そのものを安くするために、労働の生産力を高くしようとするのは、資本の内的な衝動であり、不断の傾向なのである。

生産力が上昇し、労働力商品の価値が低下して剰余価値は増大しますが、労働力商品の価値低下に比例して賃金が引き下げられれば労働者の生活は豊かにはなりません。この辺りに「労働者貧困化」の根拠がありそうです。なお、「貧困化」については、後の方の章で出てきます。

あと、労働者の階層化についても言及がありました。マルクスの時代のイギリスでも労働者の階層化があったそうです。

最後に第13段落で、「商品を安くしなくても、このような結果(相対的剰余価値の取得)がどの程度達成できるかは、相対的剰余価値の特殊な生産方法において示される。」として、次に考察するテーマが予告されています。

質問や議論

・「とはいえ」

第10段落の冒頭の一文「とはいえ、この場合にも剰余価値の生産の増大は必要労働時間の短縮とそれに対応する剰余労働の延長とから生ずるのである。」の「とはいえ」は何に対してか、という質問がありました。

前の第9段落では、ある資本家が生産力を上昇させるのに成功して特別剰余価値を取得するに至る仕組みが説明されました。この特別剰余価値の取得は必要労働時間の短縮によるものではありません。第10段落では、この同じ過程が必要労働時間の短縮によってもたらされたと理解できる(ただし、この資本家の個別の生産過程での話)、と言っています。「とはいえ」は、この違いを指しています。

・「労働力の日価値が 5s から 3s に下がれば…」

第11段落に、「労働力の日価値が 5s から 3s に下がれば剰余価値は 1s から 3s に上がる」とあります。「労働力の日価値が 5s から 3s に下がる」理由が本文にないので、レポートは、あらゆる商品生産の生産力が2倍になったとしてこれを計算し、約 3s になることを突き止めました。これについて、

- ・ここで資本の具体的な運動を論じるのは早いのではないか。
- ・生産力と労働力の価値との関係には、食料の需給など、いろいろな考慮事項がある。
- ・生産力の上昇による労働力の価値の減少の計算がないのは、それはもっと後の話だということではないか。

という意見もありました。

「資本論」の後の方にこのような計算があるのではないかと、編集人は考え探してみましたが、今のところ見つけることができていません。いずれにしろ、あらゆる商品の生産力が上昇すれば労働力の価値が低下することは間違いのないようですから、この章の理解としては、それで十分とも考えられます。

・労働者貧困化

相対的剰余価値は、生産力が上昇して労働力の価値が低下することから生じます。賃金とは労働力を販売して受け取る貨幣ですから、賃金が下がることになります。それで、労働者貧困化に関するいろいろな発言がありました。

- ・経済成長とは生産力の増大だから、それは他方で労働者の貧困化をもたらす。
- ・生産力の増大は必ず労働者を貧しくする、というのだろうか。
- ・労働者の社会的結合が進み、賃金闘争で賃下げをはね返すこともあるのではないか。
- ・非正規労働者は貧困化が進みやすいのではないか。
- ・価値と使用価値を区別する必要がある。賃金が下がっても、以前と同様な使用価値をえるのであれば、同水準の生活ができるのではないか。
- ・生産力上昇による労働力の価値低下と、非正規労働かどうかとは、無関係ではないか。

そのほかです。資本論第1巻では、このあと第17～20章で労賃、第23章で相対的過剰人口が取り上げられていますので、このあたりまで頑張って読み進む必要がありそうです。

・「科学になった」

レポートの中で「空想から科学へ」が引き合いに出されたとき、「社会主義は科学になった」ということばが紹介されました。これについて、法則性を見つけたということか、と質問がありました。「空想から科学へ」の中ほどにある「二つの偉大な発見、すなわち唯物史観と、剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露とは、マルクスのおかげ…。これらの発見によって社会主義は科学になった。」の部分です。少し議論がありましたが、社会主義は単なる理想ではなく、現実的な根拠があることが示された、ということでしょう。

・「特別剰余価値」の図解

前回「特別剰余価値」について検討したのを受けて、今回、生産力を2倍3倍に上昇させた場合に特別剰余価値が生まれる仕組みをB4用紙1枚に図解したものが、Bさんから提供されました。時間があまりありませんでしたが一通り説明して頂きました。

